ボイコット、脱投資、制裁、そしてパレスチナ精神の脱植民地化

ハイダル・エイド（ガザのアル・アクサ大学のポストコロニアル・ポストモダン文学准教授）著、脇浜義明訳

パレスチナ・クロニクル、２０２５年5月１６日　＊脚注は訳注

ケープタウンの抗議者たちは、南アフリカ政府に対し、イスラエルのボイコット、売却、制裁を要求した。(Photo: Nurah Tape, Palestine Chronicle)

「植民地主義は、単に人々を支配し、先住民の心をあらゆる形と内容から空っぽにするだけでは満足しない。ある種の倒錯した論理によって、抑圧された人々の過去に目を向け、それを歪め、醜くし、破壊する」。　フランツ・ファノン

この「紛争」は対等な二つの立場の争いではない。一方のジェノサイドを行うイスラエルは民族差別と徹底的な民族浄化と虐殺を行う入植植民地社会で、他方の我々、抑圧されたパレスチナ人は国際法で認められた抵抗権を持つ被植民地の人間だ。両者は隣人ではない。隣人とは普通隣り同士権利を尊重し合い、権利と責任において平等である関係にあるものだ。

パレスチナの占領者イスラエルと、根深い人種差別イデオロギーに駆られて「隣人」イスラエルが実施する何層もの抑圧システムに苦しむパレスチナ人の間の関係は、このような隣人関係だろうか？

この観点から次のような質問をしよう。フランス人入植者はアルジェリア・アラブ人にとって良き隣人であったか？　アパルトヘイト時代の南アフリカの白人入植者は黒人アフリカ人に「隣人としての権利」を尊重したのか？　米国南部白人至上主義者は元奴隷のアフリカ人子孫の隣人に「寛大」だったのか？

アパルトヘイトの南アフリカ共和国では、主人の白人はバンツースタン ―― 南アフリカ領のたった１２％の土地にアフリカ人が白人から隔離されて住む黒人だけの国 ――の建設を許すという「寛大な譲歩」をした。これらのバンツースタンには白人主人におべっかをする黒人の見せかけ指導者が白人指導者によって「アフリカ人の生活を向上させる行政」をやらされた。黒人の指導者たちは黒人大衆のことより、白人主人を喜ばせ、白人主人から気に入られることばかりをやった。

同じような現象はインドやアルジェリアやその他の植民地、とりわけ入植植民地でも見られた。パレスチナでも、１９３０年代に植民地政府英国に協力した「平和部隊」(Peace Bands)が存在した[1]。

懸命に主人の真似をし、主人から気に入られようとする抑圧された被植民地の人々の情けない涙ぐましい努力は種々の形態を取る。真実を受け入れることを拒否する「否認状態」(state of denial)と呼ばれる態度、ときには白人主人との「隣人間」の「人間的」関係を強調する「否認状態」もある。

この主人の模倣の最悪ケースは、奴隷が自由人になったと思ったとき、他の奴隷に対して主人と全く同じ抑圧的態度を取ることだ。主人と同じ振る舞いをするのだ。これは、主人階級が奴隷を完全服従させるために、物理的ばかりでなく、奴隷の心までも支配した結果である。「家畜黒人」(home negro)とか「アンクル・トム」と表現される状態である。

パレスチナ人はイスラエルが実施する多重的・多元的抑圧形態との絶え間ない闘いの状態にある。イスラエルとイスラエルに協力する勢力にとって最も危険なのは、パレスチナ人の集団意識を「解放プロジェクト」に仕立て上げる闘いである。つまり、単なる抑圧や弾圧状態の改善を解放と見ない意識だ。パレスチナ・レジスタンスは精神の脱植民地化を土地と人民の解放のために必要な序曲と考える反植民地主義プロジェクトである。

それは、すべての南アフリカ人の間の平等が白人アパルトヘイト・システムへのアンチテーゼとされたのと同じように、すべての人間の完全平等をシオニスト・プロジェクトへのアンチテーゼとする。１９８０年代中葉のアパルトヘイト抑圧が激しかった頃、１９９０年にネルソン・マンデルがアパルトヘイト刑務所から出てくることを予想した者がいただろうか？　南アのアンクル・トムのバンツースタンの大統領たちは、ネルソン・マンデラが白人たちをも統治する南ア大統領になり、バンツースタンが歴史のゴミ箱へ捨てられることを予想したであろうか？

１９６０年代後半に米国公民権運動と反人種差別運動の指導者マーチン・ルーサー・キングが暗殺される前に、彼は「夢がある」と言った。心の解放と新しい「黒人意識」創造の夢である。この「黒人意識」という言葉は、南アフリカの黒人意識運動創設者で、１９７７年に白人尋問官に殺害されたスティーヴ・ビコが使った。この夢が初めての黒人大統領を南アフリカで誕生させたのである。

パレスチナの場合は１９９３年のオスロ正常化合意で作り出された状況を批判的に考察する必要がある ―― 当時のすべての党派と圧倒的多数のパレスチナ人によって合意された正常化定義を[2]。この批判的考察が脱植民地化の基本的前提となる。オスロがもたらした正常化は状況を ―― 抑圧者で、植民地支配者であるイスラエル入植者と、被抑圧者の、植民地支配されているパレスチナ人の間の対立状態を事実を曲げて表現している。オスロ合意は、パレスチナ占領を「対等な二者」が土地をめぐっての「紛争」と表したのだ。

１９９３年のオスロ交渉では、米国の仲介による「対話」と「交渉」が最終的には「正しい解決」へと導き、「両者」はイスラエルの安全を保証する「和平」を達成するためにインティファーダのような「テロと戦わなければならない」と言い含められた。その結果、パレスチナ側は長年培ってきた心理的障壁を「破り」、「憎しみに満ち」「反ユダヤ主義的」教育で培ってきた「嫌悪」を除去しなければならないとされた。その「反ユダヤ主義嫌悪」が１０月７日攻撃になったとされ、７７年間にわたる類を見ない暴力と人種差別的、宗教的、優越文明論的な談話の延長線上に現在ガザで進行しているジェノサイドがあるとう事実を無視する。優越文明論的談話がイスラエルの正義感を強めるのだが、虐殺を繰り返すイスラエルは人種差別ヒエラルキー・イデオロギーを持った入植者コロニーであるという事実を無視する。

しかし、現実は、「対等な二者」の間の交渉がパレスチナにもたらしたのは次のような選択である。米国とイスラエルの言うがままになるか、それを拒否するかである。言うがままを選択すれば、パレスチナ側（奴隷側）は多層的な軍事占領システム、アパルトヘイト、パレスチナの土地へのイスラエル人入植地、イスラエルのユダヤ人国家性を認め、その代わりに西岸地区の一部に主権のない民族居住地（バンツースタン）が認可される。これはパレスチナ人の集団自殺であり、パレスチナ問題一掃の最終的打撃である。

---

[1] アラブの反乱（１９３６－３９）のとき、パレスチナ豪族ナシャビー一族を中心に、英国とユダヤ人から軍事的・財政的支援を受けて、反乱鎮圧にあたった親英民兵組織。

[2] すべての党派がオスロ合意を支持したわけではない。エドワード・サイードは反対し、抗議して PLO を脱退した。オスロ合意反対者はアラファト PA によって弾圧された。

言いままになるのを拒否すれば、つまり米国の「仲介」を拒否すれば、例によって被害者叩きが行われ、ガザと西岸地区のパレスチナ人に強烈な恐怖の攻撃（トランプは「地獄を見る」と表現した)、現在進行中のガザ・ジェノサイドを超える、パレスチナ人がこれまで経験したことがないような攻撃をするというのだ。

これらはすべて「隣人メンタリティ」が作り出す風土という脈絡から来るのである。その最上のものは抑圧状況の改善である。抑圧状況の改善というのは、ナチスドイツ時代のユーデンナト[3]やカポ[4]のようなものを、イスラエルと米政府が、保守的アラブ諸国の同意で、パレスチナに作ること[5]である。

それ故、パレスチナ人の心を脱植民地化することが一番大切となるのだ。これは、まさしくパレスチナ人主導の国際運動ＢＤＳ（イスラエルのボイコット、脱投資、制裁)、とりわけイスラエルの学術的・文化的ボイコット運動（ＰＡＣＢＩ）が成し遂げようとしていることなのだ。エドワード・サイード、マハムード・サイード、ガッサン・カナファーニ、ナジ・アル・アリ及び彼らの前の多くの批判的思想家が、イデオロギー的違いを超えて、文学作品や論文で表現したことだ。それらの作品は、過去にパレスチナ人民が実践した解放人民闘争の延長であり、同じような入植植民地主義的抑圧に苦しんだ多くの民族の闘争から学んだ教訓に依拠したものである。

ここで解放を求めるパレスチナ人の精神を表現するＢＤＳ運動の成果を説明する必要があるだろう。ＢＤＳ運動は、国際的なボイコット運動をリードする自由なパレスチナ人の心を効果的は方法で表現しており、イスラエル、米国、そして「良き隣人イデオロギー」を吹聴する疑似進歩派ペテン師たちを脅かす突破口となった。ほんの数年前まで米国ではイスラエル批判はタブーであったが、今や学生運動家だけでなく、民主党議員の間でも、イスラエル非難は一つの主流となりつつある。

ＢＤＳは慈善、博愛、抑圧状況の軽減というレトリックの運動ではない。 ＢＤＳに刺激されて多くの芸術家や文化人が立ち上がり、虐殺国家イスラエルの犯罪にノーと言うようになった。事実、クネセト（イスラエル議会）の元議長でユダヤ機関（ユダヤ人をイスラエルへ移住することを奨励する組織）の元委員長であったアヴラハム・ブルグは、２０２３年１０月７日事件のずっと前に、BDS の最も怖い面は国際世論が各国の政府への圧力となることだと警告していた。実際、次第にイスラエルに厳しい姿勢を見せる政府が出てきて、イスラエル制裁が現実化する兆しが見え始めている。１年半にもわたってぞっとするジェノサイドを続けてきたシオニスト政権は次第に孤立し始めている。

パレスチナ人にできるのは、イスラエルとパレスチナの間の巨大な力の不均衡を乗り越えるために、BDS や文化活動のような創造的活動だけである。大量破壊兵器で武装した世界で最も強力な軍隊を持つと言われるイスラエルと、人道に基づく道徳の力しか持たないパレスチナ人の間の力の不均衡を克服しなければならないのだ。これにはパレスチナ人の運動だけでは不可能で、人道的良心を持った世界人民の力の介入が必要である。かつて南アフリカの抑圧された黒人のために介入した世界人民の連帯の力、戦う黒人の主導の下でアパルトヘイト政権を孤立させた世界人民の力と同じような国際的連帯が必要である。

国際的ボイコット運動では人民の圧力で各国政府を動かすのと同じように、パレスチナの現場では、パレスチナ人民がパレスチナ解放機構（PLO)とパレスチナ自治政府（PA)に圧力をかけて、BDS の成果を台無しにする露骨なイスラエルへの協力（従属）をやめさせることが必要である。

有名な米国映画監督のクエンティン・タランティーノが２０１２年に制作した米国の奴隷制度を扱った映画『ジャンゴ繋がれざる者』に、白人主人に気にいられようと主人に尽くす黒人奴隷が登場する。主人に対する陰謀を告げ口したり、綿花畑の奴隷を逃亡させる企てを告げ口する奴隷である。

この映画の「最も面白い面」は「感謝の気持ちのない」奴隷に向けられた非難と、奴隷が求める最良のものは生活状態の改善という面を描いていることである。しかし、心の自由を得た奴隷、黒いヒーローは奴隷の本当の夢を表現し、自分の妻の自由のためには白人主人一家を撃ち倒し、屋敷を爆破する戦いの道を選ぶ。

---

[3] ユダヤ評議会。ドイツ占領下の東欧のユダヤ人ゲットーをナチに協力して運営するユダヤ人「自治組織」。

[4] 強制収容所でナチに協力するユダヤ人。

[5] パレスチナ自治政府がそれに近い。

同じようにBDSは心の脱植民地化行為であり、アパルトヘイト・イスラエルと正面から対決し、短期だろうが長期だろうが停戦なんか尊重しない。 BDSと解放されたパレスチナ人の精神は抑圧状況 —— とりわけガザのジェノサイド状況 —— の改善には満足しない。例えば、セメント５０グラム、癌治療薬３箱、赤ちゃん用液体粉ミルク５本をガザ牢獄の扉を少し開いて差し入れてくれたからといって、戦争犯罪者とその共犯に感謝の接吻をしたり、満面笑顔になることはない。

言い換えれば、BDSは、軍事的占領、人種差別、民族浄化、ジェノサイドが続く限り、どんどん力と影響力を拡大するパレスチナ・レジスタンスの一環である。

以上！